

第2次大戦前後の住まいにおける

家事空間の設計思想に関する実証的研究

Empirical Study on the Design Philosophy of Domestic Spaces in 1940s Housing

長崎大学大学院 工学研究科 安武 敦子

(研究計画ないし研究手法の概略)

日本における女性の地位は、第二次大戦前にも婦人参政権運動などの動きがあったが、大きく変わるのは戦後といえる。1945年の婦人参政権の付与、1947年の日本国憲法の制定等により進展し、高度経済成長期を通して女性の社会進出が増えていく。一方住まいにおける女性の地位に転ずると、戦前は炊事洗濯は女性の役割で、台所は土間形式で北側に置くのが常であった。家事のし易さについては大正時代から問題意識は投げかけられてはいたが、本格的に変わるのは戦後とされる。

戦後、1949年の濱口ミホ氏による『日本住宅の封建性』によって家族生活の重視、女中によらない家事空間が提示され、公営住宅の標準設計づくりにおいて、東京大学吉武研究室は51C型として台所と食事室を一体とするダイニングキッチンを計画し、日当たりのいい南側に置く提案を行った。それらが日本住宅公団(1955年設立、現・独立行政法人都市再生機構)によって明るい衛生的な場所として整えられ、ホワイトカラーの台頭とともに生まれた専業主婦たちの支持を得ることになる。

1951年のダイニングキッチンの登場まで、家事空間はどのように変容したのか、特に戦後に絞り、現存するアパート(長崎市・下関市・静岡市)を通して解明することが本研究の目的である。

(実験調査によって得られた新しい知見)

戦後の公営住宅

戦後の不燃公営住宅は1947年に着工した東京都営高輪アパートに始まる。これは2棟にとどまり、結果的に公営の不燃公営住宅の見本と位置づけられた。地方に展開するのは翌年以降となり、全国に74棟1,934戸が建設された。

設計は戦災復興院が行っており、基本的な間取りは戦前の公営住宅を踏襲している。同潤会アパートメント事業の世帯向けの住戸は、江戸川アパートなど一部を除き2間、台所、便所からなっている。2間は6畳+4.5畳間が主で、最後に建設された江戸川アパートで8畳間+6畳間と、戦後と同規模である。住戸は階段室から玄関を通して便所や台所、奥に小さい居室、表に面する側に大きな居室がある。大きな居室には床の間の設えがあり、小さい居室は台所と直結していた。このように性格がはっきりとした2居室を持ち、戦後の間取りに類似する。配置は住宅営団で冬至日照を基準にした南面平行配置が採用され、戦後もその流れを受けて大きな居室の日照を優先した配置としている。

「47型」で後に通称される都営高輪アパートの計画の基本方針は、隣戸へ延焼しないための独立性を確保した火災に強い住宅、南北2面が直接外部と接することで日照を重視した住宅、将来は階段室で向かい合う2戸を1戸に作り直すことができるよう

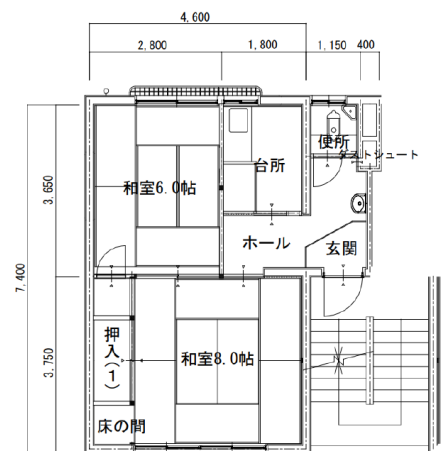


図1 47型平面図

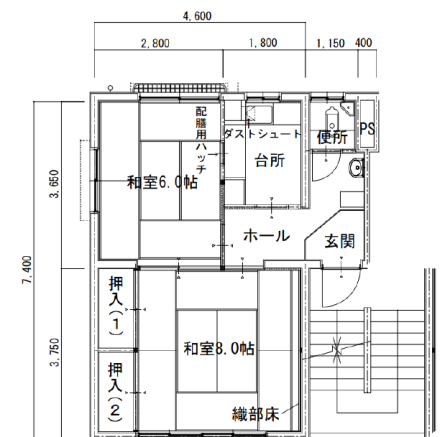


図2 48型平面図

に対応できる住宅，合理化した生活を送れるような設備の充実，梁間及び階高を少なくし資材と工費の節約を図る経済的な構造，平面については同一平面を使用するなどの施工の簡易化の 6 つである。「47 型」の住戸計画は専用面積 39.55 m²で，8 畳と 6 畳の和室，4.33 m²の台所，水洗便所，ダストシュートと洗面台が付属する廊下，下駄箱付きの玄関，9 尺の押入，3 尺の床の間からなる(図 1)。なお「47 型」のうち 2 戸は試験住宅として洋風のつくりとなっている。構造は壁式構造の方が経済的とされ，戦前はラーメン構造であったため，高輪パートは RC 造集合住宅の中で壁式構造を採用した日本では初めてのものであった。

「48 型」は，前年に設計された「47 型」の住戸プランを改良したものである(図 2)。改良された点として，外気温の影響を和らげるため最上階に住戸天井懐を設置，階高を 100 mm 上げて 2600 mm に変更，地下室に各戸収納を設置，妻側に窓を設置，床の間を廃止し押入を増設 床の間に代わり 8 畳の部屋に雲板を設置し，織部床として使用可能とした，換気のため居室の窓上部に欄間を設置，台所の造作家具を増設，ダストシュートを廊下から台所に移動，台所と 6 畳の部屋の間配膳用ハッチを設置等が挙げられる。「47 型」から「48 型」への変化として，収納の増設と家事空間の改善があげられる。造作家具の増設は収納力と使い勝手，ダストシュートの位置変更やハッチの設置は家事動線を減らすもと位置づけられる。

現存する「48 型」による復原

現存が確認されている「48 型」は，長崎市の魚の町団地，広島市の平和アパート，下関市の清和園市営住宅，静岡市の羽衣第一・第二団地，福岡市の店屋町住宅の 6 棟である(写真 1)。なお，店屋町住宅は下



写真 1 現存する 48 型住宅 (左：魚の町団地，右：店屋町住宅)

駄ばき住宅で標準設計とは異なり，公営住宅ではない。標準設計で建設された公営集合住宅は店屋町住宅を除く 5 棟となる。調査を行ったのは長崎市の魚の町団地，下関市の清和園市営住宅，静岡市の羽衣第一・第二団地で，魚の町団地は退去済みのため全戸調査し，退去者に対してヒアリングやアンケート調査を行った。清和園市営住宅や羽衣第一・第二団地については表 1 の世帯に対して，残存状況や使い方についてアンケート調査を行い，了解を得た世帯に対してヒアリング調査を行った。管理する自治体に対してはすべての自治体に対して質問票を送付し，回答を得た。

設備等については，設計図を見ると台所は 500 × 870mm の流し，コンロ台は 400 × 1170mm でいずれもが人造石研ぎ出し(人研ぎ)で，流しの脇にダストシュートが設置されている(図 3)。木製の建具は，入口側に箒などが収納できる縦長の掃除具入，流し側に調理台のある壁面いっぱいの棚で構成されている(図 3 には流し側の棚ま

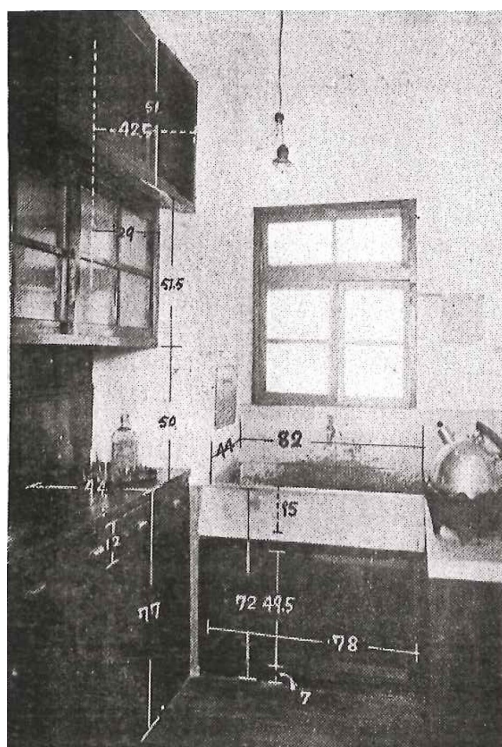


図 3 48 型の台所空間
(「筆ヶ崎共同住宅」新住宅 1949.9, p.40 より)

で映り込み)。玄関には下駄箱があり、両面から使え、その奥の洗面側には、上部に物入とタオル掛けがセットできるようになっている。洗面には L-92 と品番のある洗面台と鏡箱、さらに奥に便所があり、水洗式の和式トイレが設置されていた(図 2)。

表 1 48 型の調査状況

	長崎県営 魚の町団地※1	広島市営 平和アパート	下関市 清和園市営住宅	静岡市営羽衣 第一団地	静岡市営羽衣 第二団地
調査時期	2021年11月 ～2022年1月	—	2023年8月	2023年6月	2023年6月
現入居住戸数	0	—	8	16	14
アンケート回答件数 ()内は回収率	2 (-)	—	5 (63%)	6 (38%)	12 (86%)
ヒアリング件数	4	—	2※2	1※2	9※2
<small>※1 長崎県営魚の町団地は旧居住者が対象 ※2 下関市営清和園住宅、静岡市営羽衣第一・第二団地のヒアリング件数はアンケート回答件数と重複 ※3 現入居住戸数は、調査時期より表3-1と不整合</small>					

残存状況を見ると、人研ぎの流しやコンロ台はいずれのアパートにもなく、流しはステンレスシンクに変わっていた。木製の棚はすべての部屋ではないが、魚の町団地や羽衣団地に残っている。

表 2 48 型の設備等の残存状況

	長崎県営魚の町団地	広島市営平和アパート	下関市清和園市営住宅	静岡市営羽衣 第一・第二団地
住所	長崎市魚の町	広島市中央区昭和町	下関市幸町	静岡市葵区駒形通
交通アクセス	長崎電気軌道 市役所駅 150m	広島電鉄 比治山橋駅 300m	JR下関駅 2.8km	JR静岡駅 1.8km
用途地域	商業地域	近隣商業地域	商業地域	近隣商業地域
住戸数	24戸	24戸	48戸	24戸(第一・第二)
現入居住戸数	0戸	15戸	14戸	16戸(第一・第二)
家賃	—	8,700～21,300円	4,900～11,800円	7,000～18,200円
建 具 残 存 状 況	台所	×	不明	×
	木製棚	○		×
	洗面台	不明		×
	靴箱	○		×
	和式便所	×		○
	ダストシュート	○		×
	雲板	○		○
増 築 ・ 改 築 時 期	耐震補強	×	×	×
	浴室設置	○(1978年) (階段室側)	○(1977年頃) (階段室側)	○(1981年) (6畳の部屋側)
	バルコニー設置	×	不明	×
	トイレ洋式化	○(-)		×
	キッチン	○(-)		○(1981年)
	窓枠アルミサッシ化	○(-)		○(1981年)
	天井	○(-)		×
今後の方針	保存検討	建替え	解体	建替え等
入居者募集	用途廃止	募集停止なし	募集停止(2010年7月)	募集停止(2012年4月)
※静岡市営第一・第二アパートは、ともに住戸数24、現入居住戸数16のためまとめて表記				

台所空間の詳細

1948年度に着工した「48型」の調査を行った。台所の木製家具は棚の奥行きが上部ほどせり出すように設計されている(図 4)。調理台の上部は前へうつむく姿勢に対応していると考えられる。調理台越しに居室と配膳用ハッチでつながっており、料理や食器を出し入れできる。上から 2 段目は戸が網になっており、食品を収納できる。このように台所内で行われる家事行為の必要スペースが丁寧に検討されている。また静岡市の羽衣団地では平面図で a,b と示した小さな棚があり、b には包丁差しがあ

る。家事のし易さや家事労働の軽減が考慮されているといえる。

まとめ

戦後の間取りはどうしてもダイニングキッチンが登場した51C型が注目される。本研究では戦後すぐに標準設計により地方に展開した48型を整理した。平面計画は、戦前の同潤会アパートの間取りに近いものの、住宅営団で重視されるようになった南面への配慮が見られる。台所ではダストシュートを台所に設置し、台所と6畳の部屋の間配膳用ハッチを付けるなど家事動線への配慮、さらに収納の木製建具の設計においては家事労働や必要空間が吟味され、全国一律で供給された。雑誌からも参考になる家事空間として取り上げられていることが見て取れる。

51C型の前から、住宅における家事空間は議論されており、実現化したということは戦災復興院内でオーソライズされていたと言える。今回の研究では特定の誰かが牽引したのか、社会的に一般化していたのかは明らかにすることができなかった。今後引き続き研究し、解明したい。

(発表論文)

- [I] 志岐 祐一, 安武 敦子, 奥原 智裕: 戦後初期の集合住宅の研究 その1 1948年着工 RC造公営集合住宅の建設実態, 日本建築学会全国大会学術講演梗概集 pp369-370, 2023.7
- [II] 奥原 智裕, 安武 敦子, 志岐 祐一: 戦後初期の集合住宅の研究 その2 1948年着工のRC造公営集合住宅の残存状況と生活実態, 日本建築学会全国大会学術講演梗概集 pp371-372, 2023.7
- [III] 奥原 智裕, 安武 敦子: 戦後復興期のRC造集合住宅「48型」の現状と生活実態に関する研究, 日本建築学会九州支部研究報告集 pp77-80, 2023.3
- [IV] 初山 恵, 奥原 智裕, 安武 敦子: 旧魚の町団地における建築史および社会的評価から見た今後の運営のあり方に関する考察, 長崎大学大学院工学研究科研究報告, 54(102), pp42-48, 2024.1
- [V] 奥原 智裕, 安武 敦子: 長期経過した公営RC造集合住宅の保存・活用に関する研究—長崎県営魚の町団地を対象に—, 長崎大学大学院工学研究科研究報告, 53(100), pp16-23, 2023.1

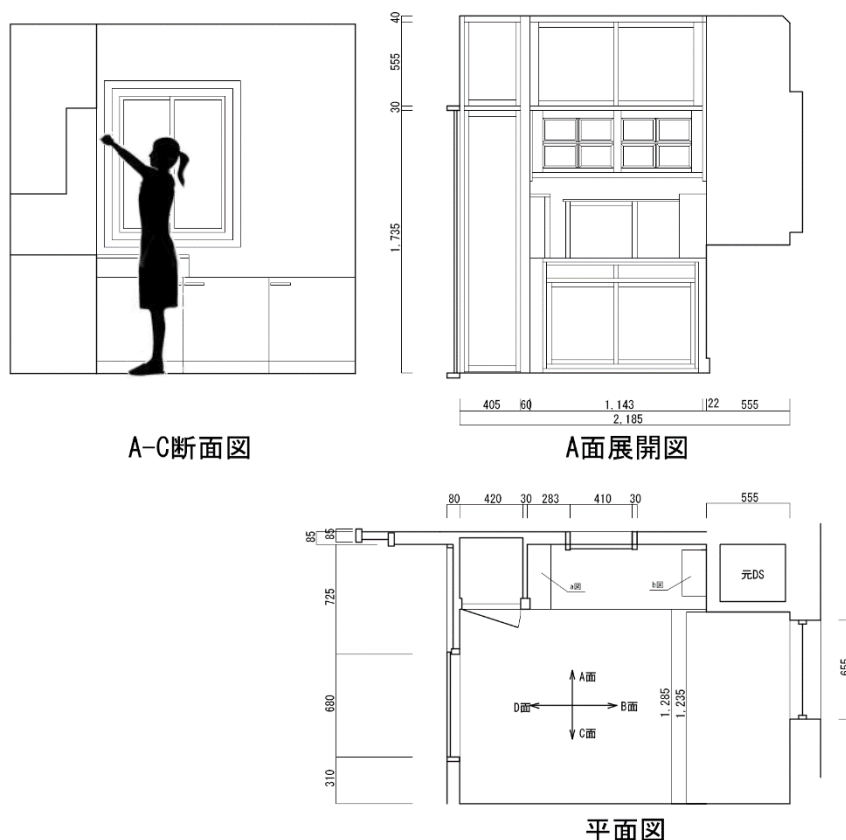


図4 48型の台所の詳細図 (a,bは羽衣団地独自)